

〔国 語〕

○ 実 施 時 間 ①グループ【15:00～15:40】(40分)

②グループ【15:30～16:10】(40分)

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は 一 ～ 二、12 ページまであります。
- (3) 答えはすべて解答用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて^{かんとく}監督の先生に合図しなさい。
- (7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。
- (8) 解答上の注意
 - ・ 字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や（ ）なども一字と数えること。なお、一マスには一字しか入れられません。
 - ・ 文末表現は、「こと」、「から」など、問いにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受験 番号		氏 名	
----------	--	--------	--

一 次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① ダンチョウの思いで別れを告げた。
- ② ガイトウに立って演説する。
- ③ 記念品を紙でホウソウする。
- ④ 商品をイチリツに値上げした。
- ⑤ 彼はすぐれたサイカクの持ち主だ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ジル・クレマンは一九四三年生まれの庭師で、パリのアンドレ・シトロエン公園の庭やケ・ブランリー美術館の庭などがその代表作だ。「動いている庭」をそのコンセプトに掲げるクレマンの仕事は、少なくともヨーロッパの伝統的な作庭とはかけ離れている。

クレマンはヨーロッパの伝統的な「生命をあたかもオブジェのように一つのかたちのなかに押しとどめようとするあらゆる試み」に違和感を表明する。しかしその一方で、アジアの伝統的な作庭——たとえば日本的な、見立てることを用いた作庭——の方法に敬意を表しつつも、これらの「庭」と自分の造る「庭」とでは「庭」をかたちづくる「境界」の概念そのものが異なっていることを挙げ、自分の作庭との違いを強調する。

「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」——それがクレマンの作庭における基本姿勢だ。その「逆らわない」対象とはなにか。それは自然の営みだ。クレマンは述べる。庭とは古来「最良のもの」を守る囲いであった、と。「庭」が事物とのコミュニケーション（作業）の場から自己と世界、私と公を接続する場所として認識され、それが家庭内の宗教的な儀礼の場を経て、やがて観賞されるものに変化していったことはすでに確認したとおりだ。この東西を貫く「庭」の歴史とクレマンの指摘をあわせて考えたとき、そこに浮上するのは人類がその「最良のもの」として、自己と世界とを接続する回路としてもつともふさわしいもの——大切なもの、美しいもの、理想とされるもの——が選ばれてきたという側面だ。

それはたとえば砂漠の国では「水」であった、とクレマンは述べる。② イスラム式庭園で噴水と水路がその中心に置かれたのはそのためだ、と。そして「水」が砂漠の世界においてもつとも希少な、命をつなぐものでありそれを手にすることが権力そのものであったように、十八世紀のフランス庭園では、啓蒙思想を体现するためにあらゆる要素が「X」に配置され、人間の理性とそれが作り上げる秩序の自然に対する優位が表現されたのだとクレマンは述べる。それは単にその庭が、啓蒙思想が社会を動かした時代につくられたからだけではなく、その時代には啓蒙主義の理想こそが「最良のもの」として認識されていたからこそ、それは「庭」の中心的なコンセプトに選ばれたのだ。

そして、クレマンはいう。今日において、私たちが「囲う」べき「最良のもの」は「生命」そのものである、と。実際に、クレマンのつくる「動いている庭」は、一見、自然そのもののように見える。そこは（とくに夏場には）草がぼうぼうと茂り、よく見ると生えているものも実に多様……といえは聞こえがよいが、その外観はむしろ「混沌」という言葉がふさわしい。その庭は噴水と花壇を中心に左右に空間が広がり、対称的に同じ植物が配置される、ヨーロッパの伝統的な「庭」とは似ても似つかない。シンメトリーな歩道などあるはずもなく、こうした茂みや、まったく人間に遠慮することなく根を張った木を避けるように、人間の歩く道がその脇に曲がりくねって配置される。これが、「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」クレマンの作庭だ。

クレマンの作庭の原型となったのは、「谷の庭」と名づけられた彼の自宅の庭だ。一九七七年にクレマンは谷底の小川の流れる土地を購入する。そこは、藪の茂る荒地と呼んでさしつかえない場所だった。クレマンは十年ほどかけてみずからの手で石を積み、そして庭を作り上げた。そこでクレマンは、「雑草」の代名詞である（フランスにとつての）外来種バイカルハナウドの、侵略的な繁茂を排除するのではなく、むしろ作庭の中心に置いた。

きっかけはクレマンがある日、庭のなかの道の真んかにバイカルハナウドが芽吹いているのを発見したことだ。繁殖力の強いこの植物は、放置すると瞬く間に他の植物を淘汰してその場所を覆ってしまう。他の庭師たちがそうしているように、クレマンもこれまではこの雑草を見つけしだい排除していた。しかし、このときクレマンはこの若い芽を抜かなかった。むしろ、この芽を避けるように芝刈り機をかけて、道のほうを作り変えた。そしてこの一本のバイカルハナウドが、これ以上繁茂しないように実を結ぶ前に剪定し、一本の木が枯れないように、しかし繁殖しないように維持しつづけることを選んだ。ここでクレマンは、自然の生態系を「そのまま」活かしているのではない。バイカルハナウドの侵略的な繁殖力を、庭の生態系を豊かに変化させる乱数として利用しつつも、その強すぎる力が他の植物を圧倒しないように介入しつづけることを選択したのだ。このとき「動いている庭」の基礎が生まれた。

同じようにクレマンは、倒れたリングゴの木を活かして、その幹から出た新しい芽のうち一本だけを選び、育て、実を結ぶまでに伸ばした。庭師の仇敵として長く憎まれてきたモグラのあける穴は、柔らかな土にしか芽吹かない植物のコロニーとして利用した。

このクレマンの自邸の庭（「動いている庭」）は、彼の作庭の最大のコンセプトを生み出し、そのコンセプトに基づいていくつもの代表作が生まれていった。パリのアンドレ・シトロエン公園では、一年目にクレマンら庭師たちはまずさまざまな植物の種を播き、その芽の出かた「から」庭のかたちを構想していった。あるいはリヨン高等師範学校の庭では、その庭のなかの道のほとんどがその年に生える草花の移動にあわせて、事後的に庭師たちによって決められる（つまり、毎年変化する）。これらの庭には絵葉書のような自然の美しさはない。しかし、訪れた人びとはそこで、その動的な自然物の生態系の運動に触れることになるのだ。

このとき留意したいのは、このクレマンの「動いている庭」の思想が素朴な自然に対する崇拜とは、かなり距離があるものであることだ。クレマンはその場所の生物、とくに植物の移動を可能ながざり活かす。しかしそれはけっして、自然そのものではない。こうした自然物の、人間の意識からは生まれることのないアルゴリズムに従った移動と変化（それは人間の目にはほとんど偶然に見える）を活かすことで、人間がそれらの多様な展開を効果的に受けとれる場所を、庭師の仕事として設計しているのだ。

「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」——クレマンのこのコンセプトは、けっしてありのままの自然を想定し、それを理想とするものではない。「できるだけ」合わせるとは、合わせられないものがあることを意味し、「なるべく」逆らわないとは、逆らわなければならない領域があることを意味する。そして何より、人間の手が加えられないその場所は「庭」ではない。人間が関与できないかぎり、そこは自己と世界、私と公を結ぶ場所にはなりえないのだ。

クレマンは「庭」を意味する英語「garden」、フランス語「jardin」の語源がともに「囲われたもの」を意味することに注目する。かつて、人びとは家屋の前に設けた今日の基準で考えると庭とも農場ともつかない「囲われたもの」のなかで作物を育てていた。そう、この「囲われたもの」で人びとが作物を育てていた時代には庭園と農場が Y だったのだ。ここで重要なのは農業とは保存の利く、そしてその土地に合った穀物など基本的に本来その土地には根づいていなかった植物を播いて、育てることによって拡大した産業だったことだ。「庭」の原型である「囲われたもの」は、いわゆる外来種を育成するための場所であったのだ。【1】もしクレマンが人間の手を排除することで、ありのままの自然を保持しようとするのならば、フランスの山間にコーカサス地方から人間の手によってもたらされたバイカルハナウドなどけっして存在してはならないことになる。【2】しかしクレマンは、この繁殖力

の強い植物の侵略的な移動を、「庭」に変化をもたらすものとして取り入れることを選択した。【3】バイカルハナウドを抜かず、その侵略的な繁殖を逆手に取ることは、クレマンにとっては自然のもつ多様な変化を活かす方法であり、さらにそこが有のままの自然ではなく、「庭」でありつづける条件であり、そして「庭」の本来あるべき姿への接近なのだ。

クレマンはそもそも「外来種」という概念に懐疑的な立場を取る。【4】人間の移動にともなう、動植物の拡散と繁殖——それが意図したものであったとしても、そうではないとしても——は、地球の自然がみずから変化する長大な時間をかけた運動を加速するが、けっしてその摂理に逆らったものではない、とクレマンは考えるのだ。

(中略)

そしてこの議論の延長にクレマンは疑問を投げかける。そもそも手つかずの、ありのままの自然とは存在するのだろうか、と。すでにこの地球に人間の手が入っていない場所は存在しない、と。そこがアマゾンの密林の奥地であれ、極点近くの氷山の麓であれ、いや、そういった場所だからこそ、たとえば人類の排出した二酸化炭素の増加の影響を強く受ける。原理的に考えたとき人間の影響を受けない自然など、人類の発生以来そもそもこの地球に一度も出現したことはないことになる。

このように考えたとき、クレマンの「動いている庭」は地球そのもののミニチュアと見なすことができる。いや、クレマンの言葉を借りれば、むしろこの地球こそが「庭」なのだ。「動いている庭」として、この地球全体に「できるだけ合わせて、なるべく逆らわない」かたちで介入することで、自然の力を最大限に引き出すこともよい人間と自然とのコミュニケーションなのだ。この世界とは、いわば「地球という庭」であり、より正確には地球とは巨大な「動いている庭」なのだ。したがって人類はすべて広義の「庭師」である、とクレマンは述べる。自然のもつ、複雑化に向かう力を人間のために用いること。クレマンという「庭師」の思想が重要なのは、この発想を私たちに与えてくれるからだ。

(宇野常寛『庭の話』講談社より)

注1 コンセプト……全体を貫く基本的な観点や考え方。

注2 オブジェ……ここでは、芸術としてとらえられる物体のこと。

注3 概念……大まかな意味の内容。

注4 啓蒙思想……ヨーロッパを中心に広がった、人間に備わっている思考力を重視することで社会の進歩をはかろうとする思想。

注5 混沌……物事が入り混じり、まとまっていない様子。

注6 シンメトリ……左右対称で、バランスがとれている様子。

注7 繁茂……草木などが勢いよく生い茂ること。

注8 淘汰……ここでは、環境に適応した個体が他の個体を滅ぼすこと。

注9 剪定……樹木の枝を切り落とすこと。

注10 乱数……規則性のない数字。

注11 仇敵……恨みや憎しみをいだいている相手。

注12 コロニー……ここでは、植物がまとまっている場所。

注13 アルゴリズム……手順。

注14 懐疑的……物事を信じず、疑う態度をもつこと。

注15 摂理……自然界を支配する法則。

問1 — ①とありますが、今日におけるクレマンの作庭の特徴を説明した次の文の A・Bにあてはまる言葉を、それぞれ指定された字数で本文中からぬき出して答えなさい。

A (五字) になるべく逆らわず、 B (八字) を「最良のもの」として考え、それを「囲う」という特徴。

問2 — ②とありますが、イスラム式庭園において噴水とその水路が中心に「置かれた」のはなぜですか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 水はどのような環境であっても重宝されるものであり、全世界に権力を示すことができるものだと考えられていたから。
イ 水はどこまでも流れ続ける性質をもっており、庭と世界がつながる様子を表現することができると考えられていたから。
ウ 水は砂漠に住む人々にとって生きるために欠かせない希少なものであり、特に大切なものであると考えられていたから。
エ 水は庭の植物の生命を維持する際に必要であり、その貴重さと美しさに相応しい扱いをすべきだと考えられていたから。
オ 水は決まった形をもたない性質があり、何者にも支配されない生命の美を表現することができると考えられていたから。

問3 X に入る言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 直感的
イ 集中的
ウ 神秘的
エ 対称的
オ 立体的

問4 — ③とありますが、このようなクレマンの作庭の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 庭の中で雑草を繁殖させつづけ、人間の手による加工が行われていない自然本来の姿を再現する作庭。
イ 外来種の繁殖力を生かすことにより、生態系のバランスが自ずと調整されつづけることを目指す作庭。
ウ 繁殖力の強い外来種に大きな実を結ばせることで、庭全体に自然が生み出す華やかさをもたらす作庭。
エ 外来種がもつ繁殖力を利用して庭の生態系に豊かな変化を生み出しつつ、それに関わりつづける作庭。
オ 他の庭師が取り除く外来種をあえて残し、自分の庭に対する周囲の人々の評価を高めようとする作庭。

問5 — ④とありますが、クレマンの「コンセプト」とそれが生み出した効果について説明した次の文の a・bにあてはまる言葉を、それぞれ指定された字数で本文中からぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

クレマンの a (二十字以上二十五字以内) というコンセプトは、庭や公園の設計を行う際に、植物の動きに応じて事後的に構想を進めることによって、 b (十三字) を感じさせる効果を生み出した。

問6 Y に入る言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 不一致
イ 未分化
ウ 非効率
エ 不調和
オ 無目的

問7 次の一文は本文中の【 1 〕4のいずれかに入ります。この一文を入れるのに最もふさわしいところを選び、1 4の数
字で答えなさい。

そして今日においてはたとえば日本に暮らす人があたりまえのように庭の花壇にチューリップを植え、サボテンを愛でている。

問8 ⑤について、獨太君と協平君という二人の生徒が話し合っています。次の会話文中の【 Ⅰ Ⅱ Ⅲ 】にあてはまる言

葉を、それぞれ指定された字数で本文中からぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

獨太 ⑤において、筆者は人類が広い意味では皆「庭師」なんだと述べているね。ぼくはこの部分の意味がよく読み取れなかつたよ。

協平 クレマンは、地球上にはそもそも「Ⅰ（八字）」が存在しないのではないかと疑問を投げかけているね。二酸化炭素は国境などを越えて全世界に広がるわけだから、人間がもたらした影響が地球全体に広がっているという考え方には納得させられるなあ。

獨太 なるほど。そう考えると、僕たち一人ひとりの行動をつき詰めて考えた先に、それが地球全体とつながるような発想が生まれるね。筆者は人類を「庭師」にたとえることで、僕たち一人ひとりが環境に対する影響力をもつことを強調したかったのかもしれないね。

協平 クレマンの仕事のように、周囲の状況をなるべく活かすことのできる方法を考えていく姿勢は、環境問題について考える際の参考になるね。

獨太 そうだね。人間が自然に対して過度に介入せず、環境自体がもっている力なるべく活かそうとする方法を、筆者は「Ⅱ（二十二字）」という言葉で評価しているね。人間が環境に対してどのように働きかけていくのか、この言葉によってより理解が深まったような気がするよ。

協平 改めて本文を読み返してみると、筆者は「庭」が「Ⅲ（十三字）」としての側面をもつものであると述べているね。ぼくは今まで「庭」に人間が理想とするものが反映されているなんて考えたことがなかったよ。日常生活のありふれた物事に対して、その奥にある思想を読み取るうとする姿勢があれば、そこから大切な気づきを得ることができるかもしれないね。

問9 次のア～カのうち、本文の内容にあてはまるものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア クレマンは外来種の植物だけではなく、庭師にとって害獣がいじゅうとされる動物が庭に及ぼす影響をも、庭を形作るものとして利用していた。

イ クレマンはヨーロッパの伝統的な作庭に違和感を表明するものの、アジアの伝統的な作庭については自身の姿勢と共通するものとして評価している。

ウ 従来の価値観から逸脱いつだつしたクレマンの仕事は斬新ざんしんなものであるため、伝統を重んじるパリの人々からその芸術性が評価されることはなかった。

エ かつてクレマンはほかの庭師と同じようにバイカルハナウドを庭から取り除いていたが、庭の道に生えたバイカルハナウドを発見して以来それを作庭に活かすようになった。

オ 庭の本来あるべき姿を尊重するという点において、クレマンの作庭の方法からは自然を神聖なものとして扱う態度を読み取ることができる。

カ 筆者は、庭に対するクレマンの発想を地球規模に拡大することで、社会が抱える複雑な課題をより簡単に解決できると考えている。

このページに設問はありません